

私たちが大切にしている“クラブ”とは
そもそもクラブとは
クラブの語意と語源
クラブのルーツ、コーヒーハウス
自発的な“アソシエーション”
非公開組織「フリーメイソン」
奉仕クラブ

2011年4月10日 東日本区1998～2011 ヒストリアン 吉田 明弘

そもそもクラブとは

私たちはワイズメンズクラブは、“クラブ例会”を大切にしています。今回、そのクラブ例会を取り上げてみようと思いました。となると、その前に“クラブ”とは何か？ということになります。“クラブ”の成り立ちと、現在のワイズメンズクラブが、どのように繋がるのかを、例会のことは、ひとまず置いて、自分なりに整理してみようと考えました。

もとより、知識の蓄積があるわけではありません。幸いなことに、『ワイズ必携』（日本区2001年）に掲載されている、草津クラブの堀江宏さんの論文『クラブとコーヒー』を軸に、インターネットと地域図書館で得られる資料でまとめました。『クラブとコーヒー』は、おそらく、日本区のワイズメンが、“クラブ”の起源に触れた、唯一の文献ではないでしょうか。

クラブの語意と語源

海外では、クラブとか、コーヒーハウスとか、協会といった、いわゆる自発的な意志で参加する「アソシエーション(Association)」の歴史研究が進んでいるそうです。そして、皮肉なことに資料は、アソシエーションを、体制を批判し、ときには転覆をはかる危険な存在として監視していた、体制側に残されているそうです。それは、明治初期のキリスト教会の活動状況が、大政官が密偵に探らせた文書によって今に伝わるのと同様でしょう。

クラブ(Club)を辞書で調べると、Clubは、古ノルド語のKlubba(heavy stickの意)からきて、一義的には、棍棒、先の方が太くなっているがっしりとした棒と言う意味だそうです。ということから、警棒、ゴルフやホッケーなどに用いるクラブ、クラブの図柄のトランプ札を指します。そして、先が膨らんでいる形状から、集まる、とか、まとめる、金を集めるという意味で、社交、スポーツ、文芸などの同志で結成されるクラブ、貿易、防衛などの国家連合体、会員に各種特典を与える共済会、飲食を提供する商業的なナイトクラブ、あるいはクラブに属する人が集う施設という意味になります。倶楽部については、英語の音と意味を同時に活かした優れた造語です。

クラブのルーツ、コーヒーハウス

人間は、社会的な動物といえますから、生存のために群を形成するだけでなく、いろいろな形で人と出会い、親交を楽しみ、教養を深め、人間性高めながら、社会に何らかの影響を与えてきます。“クラブ”も、そのひとつでありましょう。

堀江さんは、クラブの源流として、「コーヒーハウス」のことを書いています。

コーヒー・ハウス(Coffee House)とは、17世紀半ばから18世紀にかけて、イギリスで流行したコーヒーショップ兼社交場でした。

コーヒーは、アフリカ原産ですが、10世紀前後にペルシャで飲用され、やがてイスラム教圏に伝わりました。

イスラム世界では、当初は、宗教家が徹夜の祈りの際に睡魔から逃れるために飲用されていました。やがて、オスマン帝国（トルコ）の首都イスタンブールでカフヴェハーネ（コーヒーの家という意）と呼ばれる店が作られ、コーヒーが大衆化しました。その「コーヒーの家」では、それぞれ、老若男女、あらゆる階層の人が、公の立場を忘れ、家庭から離れて、こげ茶色の飲料と交わりを楽しんでいました。

ヨーロッパでの最初のコーヒーハウスは、イスラム世界との接点であったベネチアに1645年に誕生したと言われます。1650年には、英国で最初のコーヒーハウスが、ユダヤ人によって、オックスフォードで開業されました。やがて、英国・ロンドンにもコーヒーハウスが開店し、1660年代には、多くの客のたまり場となりました。この店は、文化と交歓の場として熱狂的に迎えられて、18世紀初めには、ロンドンに3,000軒のコーヒーショップが盛業していました。

コーヒーハウスでは酒を出さず、新聞や雑誌が置かれ、地域社会の情報などがありました。客は、1ペニーを支払、コーヒー、たばこを楽しみながら、客同士で政治談議や世間話をしていました。こうした市井の幅広い人々の語らいが、近代市民社会を支える世論を形成する重要な空間となり、イギリス民主主義の基盤としても機能したといわれています。このようにして、クラブ誕生の萌芽となったのです。ワイズメンズクラブのルーツといえるでしょう。

コーヒーハウスから企業が

コーヒーハウスには、情報収集の場としても重要な役割がありました。有名な店にギャラウェイ・コーヒーハウスがあります。17世紀中頃、当時の金融センターであったロンドン・シティの取引所近くに関われ、多くの商人が情報を求めて集まったといえます。

また、1688年頃にエドワード・ロイドという人物が開いたコーヒーハウスには、貿易商、船員、

保険業者たちが、たむろするようになりました。店は彼らのために船舶情報を載せた海事ニュース『ロイズ・ニュース』を発行し、船舶保険業務を取り扱うようになりました。ロイドが死去したあと、取引の場を失った保険業者たちが人を雇って新たにロイズ・コーヒーハウス（ロイドのコーヒー店）と名づけたコーヒー店を自分たちのために開かせました。そのうちに、コーヒーハウスはなくなり、ロイズ（Lloyd's）という名前が残り、ロイズ保険組合の起源となったのです。

コーヒーハウスの進化

しかし、コーヒーハウスには、さまざまな階層の人たちが、さまざまな思惑で集まるため、心得違いをする者も出て、不都合が起きました。そこで、ある文化的な背景をもつ紳士たちによって組織化されて、クラブが結成されるようになりました。大衆化と分化は必然であったでしょう。

このコーヒーショップは、英国の植民地である米国はじめ、ヨーロッパにも伝えられて、さまざまな領域のアソシエーションとして、広がることとなります。

一方、コーヒーハウスそのものは、18世紀後半以降は衰退して行き、酒場や宿屋に転業する店も多かったようです。1717年にイギリスで最初のティーハウスが開店するなど、コーヒーに代わる非アルコール飲料として、紅茶に市民の人氣が集まるようになりました。

自主的な“アソシエーション”

クラブをもう少し幅広くとらえると、前に記した、自発的な組織である、いわゆる“アソシエーション”といわれる範疇があります。

『市民結社と民主主義 1750-1914（Civil Society 1750-1914）』（シュテファン＝ルートヴィヒ・ホフマン（Stefan=Ludwig Hoffmann）は、個人の力をこえる目標を達成するために結成された会員制の協会やクラブなどの結社を自発的なアソシエーションと定義しています。あ

訳者である山本秀行氏は、ここで指すアソシエーションの日本語訳について、「市民社会組織や社会市民団体という言葉も考えられるが、結社と違って、自発性や主体性の意味合いが薄れてしまう。かつては結社といえば、秘密結社、政治結社という言葉が浮かび、政治的、党派的な意味合いが強かったが、最近では非政治的な団体や組織を示す言葉として定着してきている。そこで本訳書では政治結社や経済結社と区別される『市民結社』という言葉とした」としています。

ここには「純粋に社交だけを目的にするもので、会員の慣習やモラルを改善し、会員の感情生活を豊かにすることを目的とするものであった。そうしたアソシエーションは、はっきりと政治や商売の目的を掲げるよりも、はるかに重要なものである」。そして「社交でお互いを磨きあう『社交の技法』を実践する市民が少なくなれば、それだけ市民的モラルの低下がもたらされ、平等が専制に墮落する可能性もそれだけ大きくなる」と書いています。

そして、ここでいうアソシエーションは、「非国家、非営利、非暴力、非宗教なものと定義され、その特徴として、公式の規則（入会、会則、選挙など）をそなえていること、会員間の平等、目標の自己表明（たいていは道徳の改善）、そして自発性（任意性）があげられる。（中略）この任意入会（そして任意退会）と平等、というアソシエーションの特徴は、生まれか身分、あるいはその双方によって、会員とその資格が決まっていた近世の社団とは決定的に違う点である」。「アソシエーションは、もっと頻繁に新旧エリートを和解除させる役割を果たしたのである」と述べています。

具体的には、職工協会、文芸協会、禁酒協会、青少年保護協会、動物愛護協会、孤児院などがありました。読書協会などは、識字率に高い時代にあっては、大学教授、医師、聖職者、法律家など、教養のあるエリートが集う場でありました。

組織の中での民主化が進み、多くの人がアソシエーションに属し、1人で数多くの組織に加わる

者も出てきました。一方、現実問題として、高額会費、厳しい入会条件を課するところも出ました。人種、宗教による、排除や差別も起りました。ステータスの高いところには入会せずに、会費負担の少ない体操クラブ、合唱サークルに加わるケースもありました。

非公開組織・フリーメイソン

この、自発的なクラブや各種協会・団体を含むアソシエーションという概念の中で、最古、最大のものは、フリーメイソン（Freemason）と呼ばれています。フリーメイソン（Freemason）は、個人会員のことを指していて、団体名としては、英語では Freemasonry（フリーメイソンリー）といえます。

会員同士の親睦を目的とした友愛団体。イギリスで発生し、世界中に展開している男性の「非公開団体」です。

このフリーメイソンリーの起源については、諸説あります。

ひとつは、中世の英国のイギリスの石工職人のロッジ（Lodge：結社の集会所）説です。1360年、イギリス、ウィンザー宮殿の建造の際に徴用された石工らが、長い年月にわたる工期の中で、自分たちの権利・技術・知識を守るためにロッジで暗号を使用したのが始まりと言われます。

封建時代に領民は土地に縛られていましたが、高度の技術をもつ石工たちは、比較的自由に国境を越えることが認められていたのです。寺院や修道院、宮殿、城などの建築は、めったにないプロジェクトですから、そうした方が職人はもちろん、施主にとっても好都合だったのでしょう。各地にロッジがあり、職人たちは、そこに訪問して、その領地の政治・社会・生活などの情報を交換していました。石工説には、ユダヤのソロモン神殿、エジプトのスフィンクスの工事に発するということもあります。

テンプル騎士団説もあります。1118年に聖地エルサレムへの巡礼者保護のために結成された

フランスのテンプル騎士たちは、貿易や金融業で富と権力を得ましたが、14世紀になって、当時のフランス王に迫害され、スコットランドに逃れ、そこで設けた組織がフリーメイソンリーになったという説です。

14世紀には、石工らに貴族や、地位、富、名声、知識を持つ層が加わるようになりました。ゴシック建築の尖塔やドームを設計する高度の能力、各地を渡り歩いて得た見聞も、当時の人たちには魅力があったようです。

1717年にロンドンにあった4つのロッジが合同して大ロッジとなりました。1722年に「新しい憲章」が作られ、すべてのロッジが受諾することが求められました。この新しい憲章を境に、新メイソンと旧メイソンが区別されるようになりました。憲章の諾否で別な組織になっているそうです。

以後、カソリック教会、君主制国家に対抗するなど、世界史、特にヨーロッパの政治、宗教に大きな関わりをもつこととなります。ゲーテやモーツァルトの名も登場します。湯浅慎一著『フリーメイソンリー その思想、人物、歴史』（1990中公新書）に詳しく書かれています。

現在のフリーメイソンは、会員同士の友愛団体。具体的な活動内容は一部を除いて非公開となっているようです。

米国に生まれた国際奉仕クラブ

新大陸・アメリカには、コーヒーハウス、フリーメイソンリーをはじめ、多くのアソシエーションが移入したことでしょう。自ら望んだとはいえ、住み慣れた土地と文化を離れ、親類や友人の少ない新天地での、人々の社交への欲求の強さは想像できます。19世紀の初めに至っての米国における社交への熱狂はすざまじいものがあったようです。

20世紀になって、米国に、まったく新しい形態のクラブが生まれ始めました。後に奉仕クラブ（Booster Club）といわれるものです。

まずは、ロータリークラブ(Rotary Club)は、1905年、米国・シカゴに最初のクラブが誕生しました。ビジネスマンが、仕事の情報交換のために作ったランチョン(午餐)クラブです。例会場所を輪番(ローテーション)で提供したことから「ロータリー」の名がつけました。血縁、地縁、出自にこだわらず、閉鎖性を廃したオープンメンバーシップ性でした。

ライオンズクラブ(Lions Club)は、1916年に誕生した米国・シカゴ・ビジネスサークルが、他のサークルに呼び掛け、翌1917年、合衆国内27のクラブがシカゴに集い、ライオンズ協会(Association of Lions Clubs)を設立しました。

キワニス(Keewanis)は、1915年に、米国・デトロイトに初のクラブが誕生し、1616年にカナダ・ハミルトンにクラブが設立されたことによって国際的な組織となりました。

Nun-kee-wan-is は、現地語で「みんな一緒に集まる」です。

この3つのクラブは、週日の昼に1時間の例会をもっています。詳しく記せば、参考になるとは思いますが、現在活動中であり、日々進化していますので、迷惑をかけることにもなるので、それぞれのホームページで見てください。

ワイズメンズクラブは、ご承知のとおり、米国・トレドに生まれたトリムカクラブが、1922年になって、ワイズメンズクラブ国際協会と発展しました。創立のときから、YMCAを支えるクラブという性格を持ち、運営面では、先輩である奉仕クラブの綱領、規約、運営方法を参考にして取り入れています。創立時の国際憲法の目的の項に「各地のワイズメンの間に倫理的かつ利益になるビジネス上のアイディアや好意を交換すること」とありました。これは当時生まれたランチョンクラブとしては、そもそもクラブ設立の目的であり、当然なことでありましたが、奉仕クラブとして設立したクラブの目的としては不相当と、2年後の国際大会で削除されています。

奉仕の対象も、YMCA そのものの維持から、

YMCA のプログラム、されには YMCA とは直接関係ない事業も含むようになってきています。

奉仕に関していえば、ロータリークラブは、当初は、メンバー個人として、自分の仕事を通しての奉仕としていましたが、後に、クラブ組織として奉仕も加えました。ライオンズクラブは、当初からクラブ組織としての奉仕を謳っています。

キワニスは、幼い子どもに対する奉仕活動に力を入れています。

ワイズメンズクラブ

このような、“クラブ”の変遷の中で、私たちワイズメンズクラブは、次のような特徴をもっています。

毎月1回の定例会をもっている。

性別、人種、信仰、出身国などによって入会が妨げられない、オープンメンバーシップで、ある。任意入会、任意退会が行われている。自分の時間と金によって自主的な運営がなされている。

民主的な運営がなされている。

YMCA の活動と、クラブにふさわしい活動を自ら行い、同時に支援する。

地域社会、国際社会の問題に関心をもつ。

宗教、社会、経済、国際などの諸問題について、会員を啓発し、参加させる。

一党一派に偏しない正義を追及する。

世界 73 カ国・地域にクラブのある国際協会に加盟するクラブに所属する。

世界 125 カ国・地域が加盟する YMCA の会員となるのが求められる。

あとがき

またまた、自分の話になりますが、私が学生時代に夢中になっていたクラブの OB 会は、ちょっとワイズメンズクラブに似ていました。

名前が「のーなし会」。自らワイズメンと名乗ると似たところがありました。本当は、「No」

ばかりの世の中、なるべく「No」はなしにしようということからのネームミングでした。

会員は、卒業生の中で入会を希望した者に限っていましたが、在学中に所属はしなくても、部室にたむろしていたり、協力してくれていた人も認めました。

先輩後輩の意識はありませんでした。現役と OB が混じり合っていました。会員名簿はアルファベット順で、配偶者や子どもの名と誕生日を入れていました。

会員で、珍しい体験や、仕事に関係する卓話もありました。「のーなし会報」というプリテンも会合で歌う「ソング」もありました。

私としては、その中で定例会をもち、新しい人間関係を築いていける会にしたかったのですが、どうしてもうまくいかず、結局は、年代の違いを意識して、過去の思い出と近況を語る、当たり前前の OB 会となってしまいました。それはそれで今も年 1 回は集まったり、「平成合宿」をやったりする心温まる会ではあります。

なぜ、うまくいかなかったのだろうと、ワイズと比較してみて、クラブの中にある「奉仕事業」の存在に気づきました。「奉仕」は、古い人と新しい人、年配者と若者を接着し、人間関係を増進させているのです。そのことが、例会を活発にさせる妙薬だと思います。

これは、まったくの個人的な考えですが、ワイズは、例会から奉仕に行くのではなく、奉仕が例会に進むのではないのでしょうか。「奉仕クラブ」ではなく、「例会・奉仕付きクラブ」だと思っています。